

## 概要

場所を訪れ、感じ、考え、変換し、表し、伝え合う(語り、テキスト、写真、映像、音響によって...etc)。それらが重なり混じり合う空間の中でまた「場所」が生まれ、「感覚」も変容していく。

本プロジェクトでは センサリー(感覚)・メディアとしての映像、音響表現による「場所」の表象を多角的に捉え直し、あらたな芸術表現の可能性を探っている。アート、ドキュメンタリー映画、映像人類学、哲学等、様々な領域にまたがる制作者、研究者をゲストに迎えレクチャーやワークショップ、展覧会を開催してきた。実践的な活動として様々な場所を訪れ、フィールドワークを重ね、作品制作を行いながら、そこに現れ、変容していく私たちの「場所の感覚」について議論をおこなってきた。

(2022年度メンバー)

担当教員：前林明次(主)、小林昌廣(副)、ジェームス・ギブソン(副)

学生：石塚隆、後藤朋美、小瀬泉、新里尚平、塩澄祥大、河合将也、平本大輔、コウ・ホウカ



金生山でのフィールドワーク 明星輪寺のご住職 富田精雲さん

## (1) 『自然なきエコロジー』(ティモシー・モートン著、以文社)の読解および映像・音響作品の視聴と議論(5月～7月)

著書のキー概念である「書くことにおける自然」「とりまくもの」「エコミメーシス」「ダークエコロジー」等を手がかりとして映像、音響、映画等の芸術表現を批評的に鑑賞、議論した。自然と文化の二項対立でなくその「境界のあいまいさ」「アンビエンス」についての問題意識を深めた。

ーヴァンセント・ムーンの作品シリーズ《Take a way show》

ーアルヴィン・ルシエ《I am sitting in a room》

ージョン・ケージ《4分33秒》

ー映画「オランダの光」

ーブライアン・イーノ《Thursday Afternoon》、《Music for Airports》

ーホセ・マセダ《Cassettes 100》、《Ugnayan - Music for 20 ratio stations》

## (2) 金生山でのフィールドワーク (7月)

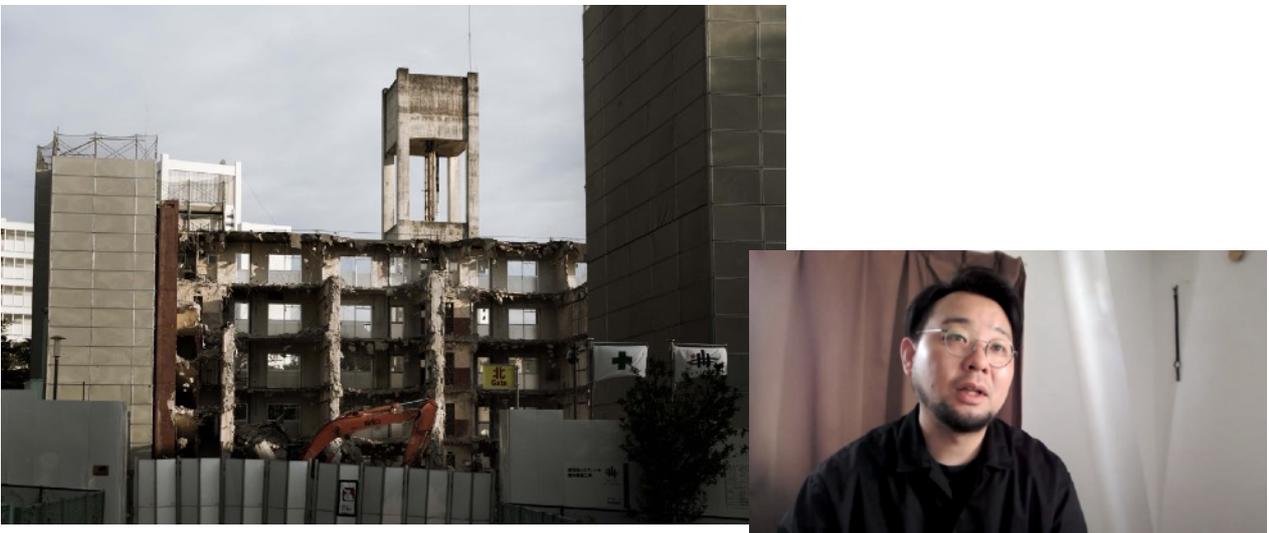
西濃の虚空蔵信仰の中心となる明星輪寺のある金生山は、大垣市街近郊にあり、古くから鉄鉱石や大理石、石灰を産出してきた。寺に残る算額や境内に棲息する陸貝やヒメボタルや隣接する化石館は地球環境の変遷に関する貴重な資料を提供する場としても注目されている。信仰・産業・科学文化と密接に関わりながら人々の営みを支えてきた金生山を訪れ、その場所をひとつの鏡として、私たちの現在を見つめた。金生山はメンバー各々が場所とのやりとりを始めた最初の地点でもあった。



金生山でのフィールドワーク

## (3) 青山真也監督「東京オリンピック2017 都営霞ヶ丘アパート」上映・トーク@オープンハウス (7月)

オープンハウスでは、《東京オリンピック2017 都営霞ヶ丘アパート》の青山真也監督を迎えてオンライントークイベントを開催した。プロジェクトメンバーを中心に、IAMAS OBを含む計20名弱が参加し、質疑応答をおこなった。



(4) 佐原浩一郎レクチャー「人間的自然のエコロジー」：ジル・ドゥルーズの初期思想をめぐって(9月)



Zoomでのレクチャー、ディスカッションの様子

レクチャー概要

人間であるわたしたちの振る舞いは、どのように為されているのだろうか。わたしたちは、はじめに一つの生物として何らかの欲求をおぼえ、次にこの欲求を人間にとっての共通の意味に変換し、最後にこれをリアルにおこなうかどうかを本人の自由において決定する。なぜわたしたちは欲求を自動的に実現するのではなく、そこに人間的な価値観を差し挟むのか、なぜわたしたちにはそれをおこなう自由、あるいはおこなわない自由が与えられるのか。二〇世紀後半の哲学者ジル・ドゥルーズは、二〇代の頃の論文のなかでこうしたことを考察している。本講義では、人間にとっての本能と制度、そして自由意志をめぐって展開される〈ドゥルーズの初期思想における生態論(エコロジー)〉を紹介する。受講者とのディスカッションでは、ドゥルーズの生態論を現代的な状況の一つの分析ツールとして捉え、受講者おのおのの問題系と結び付けられるよう、より具体的な事例に即して、この問題をともに考えたい。

## (5) 展覧会：場所・感覚・メディア「柳ヶ瀬」の開催@ビッカフェ（10月20日～30日）

2022年10月に岐阜市・ビッカフェにて開催したプロジェクト展示『場所・感覚・メディア－「柳ヶ瀬」』では、岐阜市の柳ヶ瀬商店街に焦点を当て、プロジェクトメンバーによる写真作品や音響作品の展示や、ゲストを招いたトークイベントを行いました。

ゲスト：

一宮下十有（映像人類学者、椋山女学園大学文化情報学部准教授）

一上田哲治（やながせ倉庫管理人）



## 場所・感覚・メディア

### 「柳ヶ瀬」

2022年10月20日(木)～10月30日(日)

12:00～18:00 (火曜、水曜定休)

トークイベント 14:00～16:00

10月22日 オープニングトーク、展示企画紹介

10月23日「柳ヶ瀬」トーク

10月29日 ゲストトーク、宮下 十有 (映像人類学)

10月30日 プロジェクトメンバーによるクロージングトーク

ビッカフェ

090 3308 6309

〒500-8831 岐阜県岐阜市弥生町10



「場所・感覚・メディア」は、情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] のプロジェクトです。

実際に人が場所を訪れ、感じ、考え、変換し、表し、語り合う。それらが重なり混じり合う空間の中でまたあらたな「場所」が生まれ、わたしたちの「感覚」も変容していく...  
このようなことをテーマに作品制作に取り組んでいます。

今回は「柳ヶ瀬」という場所に焦点をあて制作をおこなってきました。

集合的な写真作品の『Yanagasense(ヤナガセンス)』では、プロジェクトメンバーそれぞれの視点によって撮られた写真が並べられ重ねられることで、合成されるイメージとしての「ヤナガセ」が浮かび上がります。

『メトロノーム・ウォーク in 柳ヶ瀬』では、複数のメンバーそれぞれがメトロノームとマイクを持って歩行した音響的軌跡が、ギャラリー内で複数の線として絡み合っています。

展示期間中には、これら作品とともに柳ヶ瀬という場所について語るトークイベントも同時に開催予定です。



《Yanagasense (ヤナガセンス)》の展示風景



ゲストによるトークとディスカッション

## (6) 場所・感覚・メディア「谷汲」レクチャー&ワークショップ

2022年11月22日、プロジェクトメンバー8名で岐阜県揖斐川町谷汲にある善立寺を訪れた。この訪問の目的は、川瀬慈先生(国立民族学博物館・総合研究大学院大学准教授)による映像人類学の講義を受講し、その内容を踏まえた上で短い映像作品・音響作品を作り、1日の終わりに発表の場を持つことである。善立寺には保育園を改造したカフェ・コミュニティスペース「縁舎」が併設されており、講義・ワークショップはここで行われた。

### レクチャー

午前の部では、Modes of documentary films (Bill Nichols, 2001) による映像作品のモード分析をテーマに、川瀬先生の講義を受講した。受講者はエスニシティを題材とした複数の映像ドキュメンタリーを視聴



川瀬氏のレクチャー

し、それぞれの映像からFilm Maker (映像制作者) の視線と立ち位置を読み取り、作者がInformant (情報提供者) あるいは Protagonist (メインキャラクター) として選んだ人々・環境と取り結ぶ関係性を、六つの異なるモード (解説・観察・参加・省察・遂行・詩的) に分類する作業を行った。



谷汲・華厳寺でのフィールドワーク

### ワークショップ

午後のワークショップでは、受講者各自が講義の内容を踏まえた上で、短時間の作品を制作する、という実習課題が与えられ、受講者は、各自がテーマを見出し記録するべく谷汲のフィールドワークに出か



ワークショップ風景

け、垣間見える歴史のレイヤーをそれぞれの視点で探った。縁舎へ戻った後、フィールドで記録した素材をPCで編集し、各自が約1時間で作品を完成させた。

夜の部では、水の滴が谷汲のランドスケープで変容する様子とその音、VRバイノーラルマイクをミニ車に見立て、マイクを回しながら谷汲の追想を語り録音する試み、参道の録音とその波形の映像を線香と語りにより再構成するパフォーマンス、参道の風景や偶然発見したオブジェクトの非日常性を記録する映像、88枚の紅葉の一枚一枚に煩惱を見出し語るパフォーマンスが作品として発表された。